反省と提言

千広俊幸

われわれ人類をとりまく自然をだいじにしよう、自然保護である。いや、管理だとなかなかに問題がクローズ・アップしてきている。自然というと、どうしても森林の占めるウエイトがたかい。森林をあつかっている立場からこの動きをみると、〈人類の弱さ〉といった感慨がつよい。

森林にたいして、それが、公的な所有であれ、私的なものであれ、あつかってゆく前提には、すくなくとも、林産物の生産はもとより、森林のもっているところの人類が生きるための公益的なはたらきというものが、森林のもつ機能の大きな目玉であったわけである。このことは、保健林があったり、水源かん養林などの保安林、自然公園などがあって、その森林のもっている主たる機能をフルに発揚するために、森林のあつかいの基準が示されて、その機能に応じて扱われて今日におよんでいることからも明らかである。

これらの扱いは、社会、経済など、それをとりまく条件の変化に対応させて処理されてきているわけで、森林という多目的な機能をもっているものを対象とする者にとって、しごく当然のことである。それが近ごろのように、マスコミが国民的与論をおこさせるのに、恣意的とも思える力のあるわが国では、そのあおりで、急激にたかまった感がつよい。

いずれにしても、自然を大切にしよう、という動きがひとり林業関係者だけでなく国民的な与論にまで生長したことを考えると、健康な声として喜ばしいことであると思っている。

ただ、公害についてもそうであるが、これらの問題にたいして、学問、研究などの底辺が、ひじょうに浅い。また、わずかひとにぎりのデーターであっても、これを重視する努力が少ない。与論は、渦潮のようにおしよせるで、これを誰が、どうするという主体性のないままにイラダチがつのりヒステリックとでも思えるような動きにおもむくおそれがある。こんなことの叫びつづけでは、問題が解決するものではないしもっとシリアスなことがらとして、関係者は、着実にして息のながい対象として身がまえる態度が必要でないかと思う。

かつて本誌で、小関氏が〈市民運動として身近なことから〉を唱え、鮫島氏が〈原生林の生態学的本質を知り、理解することが必要〉と主張しておられるが、すぐ、とりくめる問題と、基本的なつめのだいじなことを、いみじくもあらわしているものとして同調したい。自然保護とは、という定義論や感覚的保全論でとどまっている段階でないような気がする。

ただ、森林を対象としているわれわれにとっても、きびしく反省しなければならないことが二つある。

そのひとつは、その技術の大部分を自然力に依存しているにもかかわらず、もっとも基本的な地質、土壌、気象、動物、植物などの基礎的な知識をもっている人が、ごくわずかの数しかいないということである。私は少なくとも、これらの知識は森林をあつかう者すべてがあるレベルで、一般的教養として最低限身につけておかなければならないものと思っている。

いまひとつは、林業家の国民へのPR不足である。皆伐はハゲ山に直結し、伐採は即自然破壊というごく単純な発想が相当の心ある人たちの発言にもあることは、まことに残念なことであり、林業というもの、また、森林施業の基本的な考えというものを自然保護という問題と関連づけて、明快に国民のまえに示す努力が足りないという感がする。こうした反省を経て、その努力をすれば決して森林を対象として仕ごとをすすめてきたいままでの行為にたいして、自然保護の与論がたかまったといいながら、国民から批判をうけるものではないと考える。

さて、ひるがえって国民にたいし、北海道の自然と人智がつくり出す二つの提言を

しておこう。

ひとつは、人口百万人をこえた私たちの住む大札幌における植物園の位置づけのことである。明治の初期に、御雇外国人ルイ・ベーマー氏に発し、宮部金吾氏により実現されたこの市民の誇りは、ただたんに北大の所有管理にかかわる学術研究の場としてだけでなく、長い間市民の生活とともに歩んできたものであり、この北国の人たちの心のなかに、自然への渇望をいやす場として定着したものと考えてよいであろう。ちなみに、当時の宮部氏の言をかりるなら

△園内には泉源あり、清水は滾々として湧出し、かしこに清流となり、ここに池塘を作り、以て頗る風趣を添えた。加ふるに地に高燥なるあり、低湿なるあり、以て各種の植物を栽培するによく適している。且この園内には札幌の処女林の一部が最も完全に保存せられて居ったので、市井の地区としては他に見るを得ざる幽邃清雅の境地にあり植物園として絶好の地と称すべきであった。▽

とある。現在の植物園の現況とこの言をくらべると、いかにもその変ぼうぶりが明瞭である。いま、自然のなかに息づく樹木としての特性も、自然生態の示す複合的な機能も、かなり失われつつあるのではなかろうか。街のなかにあるこの種の樹木集団をどんな規模で、どんなすがたで管理するのがよいのか、これからの植物園を想うとき、市民の身近な自然保護運動のようらんとして価値づけるがゆえに、気になることである。先人の偉業によって残されたこの貴重な緑地のこれからの有効な管理にたいし、学者ともども市民運動として、もりあげる必要があるのではなかろうか。

また、現在おかれている周辺環境が、当初の植物園としての機能をみたしえないことが明らかであるなら、都市化にあえぐ市民のために、さらに、長い将来をみとおしたあらたな圏域計画を意欲的にもつような運動のたかまりがあってもよいのではなかろうか。

第二の提言は、この日本列島のなかで北海道が、比較的に人類の自然への干渉の頻度の少ない地であるという。いまのうちにここに一大自然生態圏を設けたらどうであろうか。自然が生態的に他からの攪乱をうけない規模というのは、私にはさだかでないが、すくなくとも数千ヘクタールの地に地質、動植物、河川、湖沼などの天然のつくった自然系が、それぞれに単独に、またコンプレックスなかたちであやなす、いっさいの自然を代表する地域を北海道らしいスケールで設定し、それを冷厳な眼でみる科学者も、ゆたかな情感でみつめる芸術家も、己が肉体に挑戦する登山家も、ほんとうに自然を師とする人たちが、その教えを乞う場としてあったなら、どんなにすばらしいことであろうか。

日本の国には、息のながい行動が、この社会に定着しにくいという。せっかちで、激しやすく、冷めやすく、大きくテレて、くよくよ考える。日本人の一般像だともいう。この圏域は、また、こうした心の疾病をいやす自然病院でもあろう。

ある人はいう。自然と人間との関係は、いままでは自然は偉大であるから、その資源をとりつくそうと、また、不用なものを自然のなかに捨てさろうと寛大に処理してくれるものと思っていた。まさに、無限の平原を走りまわるカウボーイ経済的な感覚でよかった。しかしこれからは、まさにスペーシフィック経済で自然を考えてゆかなければならないと。

つまり、地球という有限のなかに急増してゆく人類が、ちょうど、カプセルのなかで知恵をだしあって生きてゆくということで、人間と自然の関係を価値づけるべきであると。類例のとりかたや、表現はともかくとして、より豊かに生存しつづけてゆく人類のために、いいえて妙というべきか。

（北海道林務部森林計画課）